

現象学的社会学の成立根拠について

——メルロ・ポンティからオニールへ——

上 田 裕

はじめに

現在のところ、さまざまな学派が現象学的社会学として論じられている。現象学的社会学についての明確な統一像がないというのが実状であろう。

現象学自身、「自分を定義するまでにいたっていない哲学」〔Merleau-Ponty, M, 1945, 訳, P. 2〕であるとするならば、現象学的社会学の不明瞭さもやむを得ないことかもしれない。

これまでも現象学と社会学の関係についての議論がいくつかなされてきた。^①その中で現象学的の意味が問われ、現象学的社会学について考察が行なわれてきた。こうした議論は三つのタイプに別けることができるだろう。第一のタイプは、現象学と社会学とを存立の次元を異にする個別の学であるとし、現象学が社会学一般にたいして何をなしうるかという観点から両者の関係を捉えようとするものである。その関係のもとに現象学的社会学の成立をみようとする。〔Natanson, M, 1973, Wolff, K. H. 1979〕第二のタイプは、現象学的運動というパラダイム革新

の全体の中に位置づけられる社会学を現象学的とするものである。〔Tiryakian, E. A. 1965〕第三のタイプは、比喩的な意味で現象学のパースペクティヴやアプローチを用いている社会学を現象学的とするものである。〔Heap, J. I. and Roth, P. A. 1973〕

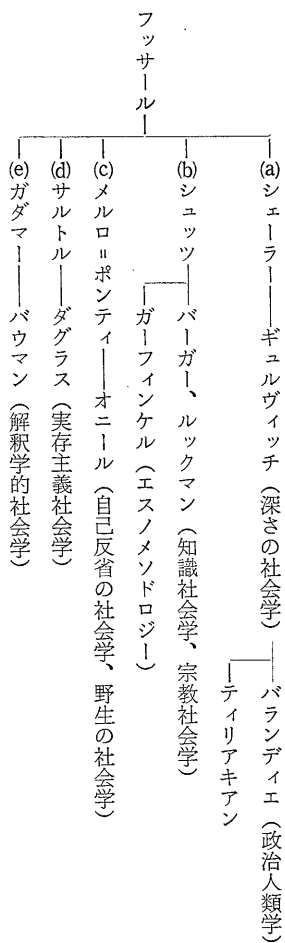
現象学と経験科学である社会学とは異なった次元で成立するものである。〔Natanson, M. 1973, P. 34〕単純に両者の接合点をもうけそこに現象学的社会学の成立をみることはできないだろう。少し視点を変えていうならば、現象学的社会学は、現象学と同じ問題関心やパースペクティヴをもち得ない、また、もつ必要はないということである。現象学的社会学は独自の問題関心とパースペクティヴをもつことで社会学として存立しうることになる。必要なことは、残余的にでもなく比喩的にでもなくポジティヴに現象学的社会学を規定し明確にすることである。

「現象学はただ現象学的方法によってのみ近づき得るもの」〔Merleau-Ponty, M. 1945, 訳, P. 3〕であるならば、現象学的社会学もまた文献を分析することで規定することは無意味かもしれない。けれども、現象学的社会学がどのどのようにして社会学として独自の問題関心とパースペクティヴをもちえたのかを示すことで、より現象的にアプローチし理解することができるようだろう。つまり、現象学のレベルのものをどのようにして社会学のレベルに変換させて現象学的社会学を成立させているかを考察することが本論の目的となる。

このように発生論的に考えるとき、現象学的社会学と考えられる社会学のうち、フッサールの現象学に直接影響を受けて成立しているものは少ない。フッサールと現象学的社会学者を媒介する哲学者の存在が想定される。おおむね次のように図示されるであろう。〔図一〕

ここでは、(c)、フッサール——メルロー・ポンティ——オニールという流れの社会学をとりあげる。オニール (O'Neill, J.) の社会学は「自己反省の社会学」あるいは「野生の社会学」(Wild Sociology) として位置づけられ

図一



る。オニールはカナダの社会学者であり、その社会学はメルロ・ポンティの実存的現象学の影響を強く受けている。また、思想的背景としてメルロ・ポンティ以外の重要な人物はマルクス (Marx, K)^③とヴィコ (Vico, G)^④である。このオニールが、メルロ・ポンティの現象学的関心とパースペクティヴをどのように解釈し、自己の社会学の関心とパースペクティヴに変換しているかを考察し分析することで論を進めてゆく。この手続きの中でたえず問われていることは、社会学がなぜ現象学的でなければならないのかということである。この間に答えることで現象学的社会学の成立根拠を示したい。

一、現象学的関心から現象学的社会学の関心へ

I

ここでは、メルロ・ポンティの実存的現象学が何をめざしていたかを、オニールのメルロ・ポンティ解釈に基づき考察してゆく。

メルロ・ポンティは、「現象学とは何か?」〔Merleau-Ponty, M. 1945, 訳, P. 1〕と云う基本的な問いかけをした。だが、いまだにこの問には答えられていないだろう。〔Natanson, M. 1973, P. 3〕

メルロ・ポンティによれば、現象学は二律背反を包含する哲学である。それは次のような意味になる。現象学は形相分析 (eidetic analysis) であり、実存の事実性にもとづいてのみ可能となる人間と世界との解釈を考察する。私たちが世界に自然的態度で対面しているときに世界の実存を「作用の外に置く」(“put out of play”) 超越論的哲学であり、世界とそれに結びつけている志向性との相関性をとりもどさせる。「厳密科学」であろうとしながらも、空間や世界についての現象学的記述を「生きられた経験」(“lived experiences”) として提起する。自然科学や社会科学の因果分析とは無関係に在るがままの経験を記述しようとするのにたいし、フッサールの後期の研究のように「発生的現象学」(“genetic phenomenology”) である。(O'Neill, J. 1970, PP. 24-25)

このような現象学が目的としたことは、(1)、ものにその具体的な相貌 (physiognomy) をとり戻させること、(2)、人間に世界との交渉の個々のやり方をとり戻させること、(3)、主観性に歴史でのその個有性をとり戻させること、であった。このような事柄は、(1)、動物と人間の心理学の研究、(2)、知覚の現象学、(3)、歴史と社会科学においてこうしたパースペクティヴを払げること、の考察のうちにみることができるとする。(O'Neill, J. 1970, PP. ix-x)

このような目的を達成するための手段あるいは方法として現象学的還元と記述の方法がある。この現象学的還元にある動機は、私たちが世界を理解している同じやり方で私たちが理解している世界をもう一度疑わせることである。その反省のプロセスは時間の流れの中で行なわれる。そしてそのプロセスで意味がどのようにして発生してくるかが考察される。それゆえ、還元の動機は考古学的 (archaeological) であることになる。つまり、そこには、私たちの起源を求める間があるということであり、絶えず始まりに帰ろうとする意図があるということである。ま

めに必要な専門的知識——商売のコツ、経験法、ことわざの知識、民俗知識 (folk wisdom) ——、を探究しようとするところにあるといえる。[O'Neill, J. 1974, PP. 34-54] 結局、野生の社会学の関心は私たち自身の生活——研究者の研究生活をも含めて——の形成にある。それは生きられる世界と私たちとの原始的結びつきを捉えようという現象学的関心を日常的活動のレベルでの社会的関心に置き換えたといえよう。

ふたつめは、野生の社会学は「私たちが知っていることを私たちに常に忘れさせる」科学に対して抗議しようとしたことである。[O'Neill, J. 1974, P. 39] この抗議は三つの方向での関心として考えることができる。

(1)、支配の構造に同化しようとするプロフェッショナル社会科学の野心を拒否しようとする。^⑥ その支配の構造は研究者をして被抑圧者に対して抑圧者の眼で見ることをまた抑圧者の言葉を押しつけることを強いるものである。

[O'Neill, J. 1974, PP. 78-79] このような支配の構造によって生じてくる抑圧的コミュニケーションからの解放を野生の社会学はめざす。そのために私たちは常に人々と共に意味を創るという作業に参加しなければならない。そのとき、私たちは、人々が働くことを、つまり人々がどのようにに見、感じるか、何を聞いているかを知らなければならない。また、段々のぶどう畑や鉄道や波止場、工場や鉱山や船の中、トラックのゴウ音や製材所の金属音、漁師の寒さ、物の重みなどを思い出す必要がある。このとき、野生の社会学者は愛の思考 (love's thought)^⑦ を理解していなければならない。[O'Neill, J. 1974, PP. 3-7]

(2)、社会学を賤業 (skin trade)^⑧ として考えようとする。社会学は科学となりプロフェッショナルの地位を持つことを熱望してきた。そのために、歯医者や服装や設備と同じように、社会学的道具立て——事務所や研究所——を持つことを、そして専門家の眼でみることを心がけてきた。オニールはこのような科学としての社会学を拒否する。むしろ、社会学は賤業として考えるのが相応しいという。この場合、賤業は、下位カーストであることを、上位カ

ーストを身体的ケガレから守るということを、人間の身体をとりまく神聖さと卑俗さのアンヴィヴァレントな雰囲気を持つということの意味している。また、こうした社会学は、社会学が人々から取り上げたものを人々に戻す学であり、他の自然科学や社会科学を必要とするという意味で、共生的科学 (Symbiotic science) であるという。[O'Neill, J. 1972, PP. 1-10] かくして、オニールの関心は、私たちと世界や他者との関係を身体を媒介とする次元で捉えようとするものに変換されたといえるだろう。

(3)、科学の客観主義と自然的態度——前科学的基盤——に対するフッサールの批判を、オニールは、現象学が批判的であるという意味に解釈する。批判的行為は、哲学的コミュニティ、文学的コミュニティ、科学的コミュニティへの所属証明であり、出所と出所の確かさを同時に持つものである、という。このような批判的行為が可能になるのは、自己反省を通じてである。この自己反省によって、自己の社会的所属や置かれている歴史的状况を理解することができる。これらのことは、自己反省の社会学へと展開してゆくことを示している。[O'Neill, 1972, PP. 221-236]

二、現象学的パースペクティヴから現象学的社会学のパースペクティヴへ

I

「現象学の最も重要な収穫は世界または合理性についてのその概念のなかで、極端な主観主義と極端な客観主義を接合させたことである。」[Merleau-Ponty, M, 1945, 訳, P. 22]

この主観主義を代表しているのが合理主義あるいは超越論的哲学であり、客観主義を代表しているのが経験主義

あるいは実証主義であると考えられる。ここでは、両者のパースペクティヴを現象学のパースペクティヴがどのように超越し接合しているのか検討してみたい。

(1)、合理主義のパースペクティヴでは、世界や他者は構成主観に還元されてしまい、自己は世界から分離してしまっている。その世界や他者の構成は純粹な反省で捉えることができる。意識と反省とを同一視することで、意識の反省的意識と前―反省的意識とのどんな弁証法も考えることができないという批判をメルロ・ポンティから受ける。

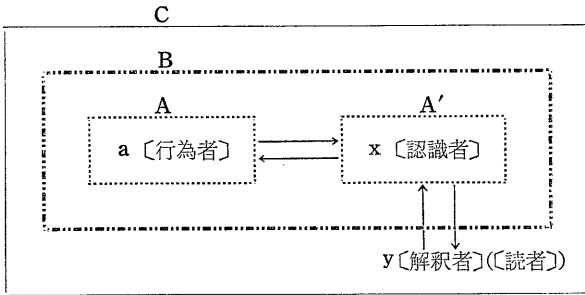
(2)、経験主義のパースペクティヴでは、意思や主観性を考えず、ただ客観的世界があるだけである。そのときの世界はそれだけでは意味をもたない。意味が付加されるだけである。

これらの二つのパースペクティヴでは、主体と世界との間に生きている対話や弁証法を全く考えることができない。二元論に陥っているのである。つまり、両者のパースペクティヴは原子論的 (atomistic) アプローチであるということである。経験主義は経験を小さな断片に解体してランダムに組み合わせる。また、合理主義は同じように経験を小さな断片に解体して意味付与の意識的な働きで組み合わせる。(Spurling, L. 1977, PP. 10-14)

(3)、現象学のパースペクティヴは、こうした合理主義と経験主義のパースペクティヴを超越しようとする。それは、主観性としての身体性が相互主観性であるということによって解決しうる。その身体によって、私たちは「主体―客体」関係を発見することができる。また、身体によって、物質の精神化 (spiritualization) と精神の物質化 (materialization) を経験する。たとえば、左手で右手を触れる場合、右手は物理的のものとして経験されるがすぐにそのプロセスは逆転することを経験する。つまり、私たちは、精神やパーソナリティの二次的構成に先立つ身体を知覚しているということであり、身体には前―反省的な共同作業があるということである。いいかえれば、

このことは、私たちと世界あるいは他者との間には身体を通じての対話があるということでもある。身体を通じて私たちは世界について語りうるし、逆に、世界は身体を通じて私たちに語りうる。これは、身体を通じて、私たちと世界や他者との関係が構造化されていることを意味する。〔O'Neill, J. 1970, PP. 36-44〕

図(一)



II

先に述べた哲学のレベルでの議論を社会学のレベルに置き換えて議論することができる。その議論をできるだけ容易にするために、行為者と認識者と解釈者(読者)とそれらを取りまく世界との関係を図式化し、それを用いて論を進めてゆきたい。〔図(二)〕

(1)、合理主義のパースペクティヴに対応していると考えられるのは、主観主義の社会学のパースペクティヴであろう。これは、行為者の主観の意味に注目し、その主観の意味を理解しようとする社会学のことである。その行為における主観の意味は行為者が付与したものの構成したものである。その行為における主観の意味の理解は認識者が行為者の立場にアナロジカルに同一視することによって可能となる。このとき、行為者の意味の構成原理と認識者の意味の構成原理が異なるにもかかわらず理解可能としている。行為者と認識者の関係は分断されたままである。

(2)、経験主義のパースペクティヴは、客観主義の社会学のものに対応しているといえるだろう。これは、行為の客観の意味に注目し、その意味によってその行為を

説明しようとする社会学である。行為者に外在している意味、つまり、認識者が可視的あるいは経験可能なものから構成した意味を用いて説明しようとするパースペクティヴである。このときの行為者はその客観的意味の選択主体であって意味付与主体ではない。この場合でも、行為者と認識者との関係は分断されたままである。

このような主観主義と客観主義のパースペクティヴをのり越えようとする意図が野生の社会学のパースペクティヴにはある。この野生の社会学のパースペクティヴに移る前に、両者のパースペクティヴを克服しようとした解釈学的パラダイムのパースペクティヴを検討してみたい。

(3)―(4)、解釈学的パラダイムのパースペクティヴは、解釈学を拠りどころにするものである。この解釈学は、「意味」とその「理解」(解釈)という共通の課題をきっかけ、「意味」がもつ社会的―歴史的な次元と、「理解」がもつ存在論的次元との解明に力を注いでいるように思われる、と山口氏はいう。この解釈学的パラダイムで扱われる意味は再コンテクスト化された意味である。このパースペクティヴの場合、a「行為者」もx「認識者」も、B「主観的意味付与以前の先構造」のなかに位置づけられる。そのとき、x「認識者」はy「解釈者」の立場に移ることによって、a「行為者」の行為の意味をテキストを読むのと同じように読む。x「認識者」とy「解釈者」の位置を弁証法的に往復することでa「行為者」の主観的意味を理解できることになる。〔山口節郎、一九七九、一〇〇―一二三頁〕

(3)―(4)、野生の社会学のパースペクティヴは、a「行為者」もx「認識者」もy「解釈者」(読者)も、相互に意味を創り出す作業のパートナーとして捉えるものである。それぞれの間には永遠の対話があるだけである。その意味の共同構成と対話を可能にするものは愛の思考であり愛の世界創造の性格であることになる。そして、a「行為者」の行為が理解可能とするB「主観的意味付与以前の先構造」は、解釈学的パラダイムのパースペクティヴの

ように Y「解釈者」に対して客観的に在るのではなく、身体において制度化された構造として、また、身体に留められた記憶として在る。たとえば、それは、労働がもつ相貌 (physiognomy)——農夫の曲がった背中、ウェイトレスの脚部の静脈怒張、トラック運転手の肩こり——や、単に技術に還元しえない肉体労働——手術、ピアノ演奏、綱渡り——に観ることができるとして、野生の社会学者は記憶の職務をもち、あらゆる人々との対話を通じて意味を創る共同作業に参加しなければならない。また、野生の社会学の読者も、著者との対話を通じての意味の共同構成の作業に参加することが要請されることになる。〔O'Neill, J. 1974.〕

三、結 語

結局、オニールの社会学における現象学的の意味は三つあると考えられる。

第一は、現象学的とは野生的である^⑩ということである。つまり、オニールにとつての野生的とは、身体の遺産と私たちの周りの人々から創られる生活を、また、感性と知性の働きによつて創られる生活を、私たちとそのような日常世界や他者たちとの身体を通じての、そして意味を創るという共同作業での絶えざる対話によつて探究してゆこうということである。それは野生の社会学として結実されることである。

第二は、批判的であるということである。現象学的関心が分析科学に対する批判であつた。それを受けつぎ、野生の社会学はプロフェシヨナル科学を拒否しようとした。また、批判的行為は或るコミュニティへの所属証明であり、その批判を可能にし基礎づけるのが自己反省であるということであつた。自己とコミュニティとの結びつきを捉え批判という行為を行なうことが現象学的であることになる。それは自己反省の社会学において達成されることである。

第三は、真理の実現であるということである。つまり、芸術と同じように、こ・こ・こ・こ・こにおいて真理が実現されていなければならないということの意味している。野生の社会学者が書物として研究を発表するとき、そこでは書物において読者との間での絶えざる対話により意味を創り出す共同作業が行なわれる。従って、野生の社会学は詩的に表現されねばならず、民族芸術 (folk art) であることになる。

このようなオニールの現象学的社会学が果たして社会学といえるのかどうかという疑問が湧いてくる。これまでの議論でオニールの社会学のすべてを語っているわけではないけれども、オニールの社会学には、社会学の明確なイメージが出てこないのである。それは、従来の社会学の伝統の脈絡に沿った社会学的手続き——オニールにすればそれは社会学ではないのかもしれないが——が不明瞭であることによって思うように思える。たとえば、日常生活がどのように創り出されてゆくかそのやり方を探究する具体的手続きを明らかにしていない。オニールの野生の社会学の具体的な実際的な研究を待つしかないのかも知れない。

社会学がなぜ現象学的でなければならないのかを問うことは、絶えず社会学とは何かという問いかけによってリフレクトされて答えられなければならないことである。そのとき社会学を明確なものにするためには、社会学がどの程度まで理解する必要があるのかを明示しなければならないだろう。社会の探究が社会学であるとはいえないのであり、その社会をどのレベルまで理解することが社会学であるのか、また、社会学がどのレベルまで理解可能なのかを示す必要があるだろう。また、即時的に存在するものとしての人物 \vee と、私たちのうちに存在するものとしての人意味 \vee [Merleau-Ponty, M, 1960, 訳, PP. 164-165] が社会学にとって何であるかを明らかにしなければならないだろう。

現象学的社会学の成立根拠を問うとき、他の現象学的社会学——特に、シュッツ——バーガー、ルックマンの流

れ——も、本論で行なったアプローチで分析し、比較検討することが筆者の課題として残る。またこのような現象学的社会学の適用範囲の限界を示すことも課題となろう。

注

① この点については、既に、拙稿「現象学と社会学についてのノート」（『佛大社会学』第五号、一九八〇）において簡単に論じたことである。

② オニールは、現在ヨーク大学の教授であり、*Philosophy of the Social Sciences* と *The Human Context* の編集者でもある。メルロ＝ポンティの著作 *Humanism and Terror* と *The Prose of the World* の英訳をしている。

③ 自らマルクシストであると名のつてゐる。[O'Neill, J. 1972, p. 264]

④ [O'Neill, J. 1976.] を参照。

⑤ もちろん、現象学的関心が一對一の対応をして現象学的社会学の関心に変換されているというのではない。

⑥ このような観点から、栗原彬氏はオニールの「野性の社会学」を紹介している。[栗原 彬、一九七六]

⑦ 愛の思考とは、その対象を絶対的に必要なものにするという愛の「世界創造」の性格をもった思考である。

[O'Neill, J. 1974, p. 7]

⑧ 仲村祥一氏は「Skin trade」を『汚れた商売』と訳して

いる。[仲村祥一、一九七五]

⑨ 山口氏は主観主義の社会学を「解釈的パラダム」として、客観主義の社会学を「規範的パラダム」と呼んでいる。[山口節郎、一九七九]

⑩ メルロ＝ポンティの野生 (sauvage) の意味は、ロコス以前のロコスであり、表象に先立つ野生のことである。[ティリエット・X、一九七三] を参照。

参考文献

• Heap J. L. and Roth, P. A. "On Phenomenological Sociology" A. S. R. vol. 38 (June), pp. 354-367, 1973.

• 栗原 彬、「民衆理性の存在証明——野性の社会科学のための探究ノート」、『思想の科学』、五月号、三一—一九頁、一九七六。

• Merleau-Ponty, M. *Phénoménologie de la Perception*, 1945

『知覚の現象学』、竹内芳郎・小木貞孝・訳、みすず書房、一九六七。

- Merleau-Ponty, M. *Eloge de la Philosophie L'Oeil et L'esprit*, 1953.
- 『眼と精神』、滝浦静雄・木田 元・訳、みすず書房、一九六六。
- Merleau-Ponty, M. *Signes*, 1960.
- 『シニシ・ー』、竹内芳郎・他・訳、みすず書房、一九六九。
- 仲村祥一、 「日常生活への社会学的接近」、『社会学を学ぶ人のために』、仲村祥一・編、世界思想社、三—三〇頁、一九七五。
- Natanson, M. "Phenomenology and the Social Sciences", *Phenomenology and the Social Sciences*, Vol. 1. Natanson, M (ed), Northwestern University Press, pp. 3-44, 1973.
- O'Neill, J. *Perception, Expression, and History—the Social Phenomenology of Maurice Merleau-Ponty*, Northwestern University Press, 1970.
- O'Neill, J. *Sociology as a Skin Trade—Essays towards a reflexive sociology*, Heinemann, 1972.
- O'Neill, J. *Making Sense Together—an introduction to wild sociology*, Harper & Row, 1974.
- O'Neill, J. "On the History of the Human Senses in Vico and Marx". *Social Research*, vol. 43. No.4, pp. 837-844, 1976.
- Spurling, L. *Phenomenology and the Social World—the philosophy of Merleau-Ponty and its relation to the social sciences*, Routledge & Kegan Paul, 1977.
- Tiliette, X. *Merleau-Ponty—ou la mesure de l'homme*, 1970.
- 『メルローポントーあるいは人間の尺度』、X、ティリエット、木田 元・篠田 憲一・訳、大修館書店、一九七三。
- Tyrakian, E. A. "Existential Phenomenology and the Sociological Tradition". A. S. R. vol. 30, pp. 674-688, 1965.
- Wolff, K. H. "Phenomenology and Sociology", *A History of Sociological Analysis*, Bottomore, T. & Nisbet, R. (ed) Heinemann, pp. 499-556, 1979.
- 山口節郎「解釈学と社会学——解釈的パラダイム批判——」、『思想』、五月号、一〇〇—一二三頁、一九七九。